

戊辰戦争における衛生隊のはじまりと 看病人役割の変化

鈴木 紀子

東京医療学院大学看護学科新設準備室／看護史研究会

1686（慶応4）年1月3日、鳥羽・伏見の戦いで始まった戊辰戦争では、奥羽越列藩同盟計31藩が新政府軍と対抗することとなり、新政府軍は会津攻めを三方面（平潟方面、白河方面、高田・新発田方面）に分れて進軍することとなった。日本海岸沿いをとり平潟方面に進んだ海道軍には関寛齋が、白河方面に進撃し信濃川の渓谷沿いの道をとった山道軍には、佐藤進が軍医長として従軍した。越後口方面の北越軍には赤川玄樞を頭取とし、越前藩の橋本綱維、綱常兄弟らが従軍し、のちにイギリス公使館医官ウィリアム・ウィリスも総督府からの要請により、治療に加わった。

橋本綱常が従軍した北越戦争では、綱常の提案により、戦地での仮紮所となる「動病院」は隊とともに進退し、後方の病院は「不動病院」として一定の地に留まり、治療にあたるという戦時救護体制がとられた。この治療体系は、西岡香織により、出征軍衛生機関業務系統が形成されたとして意義付けられている。さらに佐久間温巳が、関寛齋の「奥羽出張病院日記」を研究し、その医療実態を明らかにした。本研究では、そのような先行研究成果に負いながらも、関寛齋の東京への移送において看病人が加わっていたことに着目し、戊辰戦争の過程において看病人役割の変化について、考察することを目的とする。

戊辰戦争に参加した政府軍では、各藩が医師（殆んどが漢方医）と看病人を伴って従軍する体制がとられた。関寛齋が軍医長を拝命した「奥羽出張病院」では、門人や知人、現地徴用、各藩医らを付属医として雇い入れ、治療にあたった。「奥羽出張病院」は設立当初、野戦病院としての機能を持ち、戦線の前進に伴い分院を設けて移動したが、戦禍が激しさを増し負傷兵が次々に運び込まれてくる状況に、重症患者は横浜軍陣病院へ移送する方針がとられた。寛齋は6月17日から船便で合計6回、横浜軍陣病院への移送を行っており、移送には必ず付属医師1名を付き添わせた。

3回目の移送では、初めて看病人4名が付き添っており、4回目は6名、6回目には5名の看病人が付き添っていた。9月4日には、大村益次郎より奥羽出張病院を「大病院」と称することの連絡が入り、出張病院は兵站病院としての機能へと変わる。9月22日の会津藩の降伏の報せが10月4日に病院へもたらされ、回復した者は順次退院させると同時に、直ちに引き揚げ準備が開始された。引揚に際し、10月6日総督府から会計局への通達の中には「看病人、重病へハ一人ツツ、軽キ病人ニハ三人ニ一人ノ割」として、負傷者の重症に合わせて看病人を配属する指示が出された。

東京への引揚は、入院患者60名を、約20名を一組にして、一番立・二番立・三番立・四番立の4組に分けて10月26日・27日・28日の3日間で行われた。これらの移送では、医師12名、看病人52名（男31名、女21名）、人足302名が付き添っていた。つまり東京の大病院への移送は、付属医・看病人・人足で構成された、いわゆる「衛生隊」がわが国ではじめて編制されていたと位置付けることができる。

戊辰戦争では、安塚の戦いで女性看病人が9名雇い入れられたことで、わが国の女性看病人の始まりとされているが、その仕事は洗濯、飯炊きといったいわゆる家事・調理部門といった女性の仕事であった。しかし、奥羽出張病院の東京への移送では、患者の重症度に合わせて看病人が配属されており、これは治療過程において看護の重要性が認識され、看護を担う者として看病人が雇い入れられたと判断できる。このように戊辰戦争では、看病人は単に家事・調理を担う役割から、衛生隊の構成要員となり、医師の治療後の看護を担当する者へと変化していた。